

第6章 吉本隆明と『思想のアンソロジー』⑧

元おやさと研究所長
井上 昭夫 Akio Inoue

(前号よりの続き)

何事にも慎重な三木成夫先生は、講演では、十分にまだ研究していないので「元の理」についてはふれないとの予定であったが、本筋の話に必要な胎児のスライドが講演の途中、機械の故障で動かなくなった。機械を修理している時間を利用して、「元の理」について私が先生の感想を求めたのであった。昨晩は井上さんに「元の理」について数時間前から感想を聞き出されて、いささかまいっているのですが、と前置きして語られた先生のユニークな「元の理」の印象に、天理の聴衆は大きな驚きと感動でもって反応した。いま考えるとスライド映写器の故障は、先生に「元の理」について語らせるための神のいたずらであったのかも知れないと思う。

講演ののち、山の辺の道を独りで歩きたいと言われ、翌朝リュックを背負って石上神宮の参道から森の中に独りすい込まれるように消えてゆかれた。山の辺の道は18、9年前子供と歩く予定であったが、出発のその朝、子供の発熱で取り止めざるを得なかったのがようやくいまになって実現したとの事。あとで聞くと、途中、山の辺の道から西に出て三味田という村にある天理教祖のご誕生殿を訪れ、人間宿し込みの場所と教えられるぢば・天理の神殿を真北に見て、胎内を想起させるようなこの大和盆地の一角の高台から、しばし瞑想にふけられたとのことであった。

後日、先生にいただいた胎児の聞く胎児音のテープのコピーを、天理国際シンポジウムに出席された哲学者である中村雄二郎先生に差し上げた。季刊『ヘルメス』第10号に掲載された「六大にみな響きあり—宇宙リズムと形態生成」の中で、宇宙の音と対照して展開された雄大なコスモロジーの世界は、「胎児の世界」がみごとに「宇宙の世界」とすぐれた哲学者によってドッキングされた論文となっていた。

1986年12月18日、天理国際シンポジウム東京会議が終了した翌日、私は三木先生に連絡をとり、赤坂プリンスホテルでジョゼフ・ニーダム先生、魯桂珍先生と昼食をともにとっていただいた。“『胎児の世界』は、ニーダム先生一人に捧げるために書いたようなものです”と私にかつて申されていた三木先生は、いささか生化学者として大先輩の84歳の老碩学を前にして緊張しておられるように見うけられた。

英語の論文を二、三ニーダム先生に見せられ、ニーダム先生の胎内学のいまや古典的名著となっているといわれる著書にサインを求められ、ニーダム先生が道教に興味をもたれたのは、先生の発生学の諸研究にその動機があったのかなどと、さかんにその因果関係を尋ねておられたが、ニーダム先生の返答は否であった。

あとで魯先生に聞いたのだが、ニーダム先生が道教や中国文明について興味をいだかれるようになった遠因、つまり魯先生との偶然の出会いが、突然降り始めた雨であった。中国から留学して間もない魯先生は、ケンブリッジ大学構内で講義の校舎がどこか分からず、雨をさけてビルの軒下で途方にくれておられた。その時、向こうから雨の降る中を自転車でこちらに向かって来られたのが若き頃のニーダム先生で、ニーダム先生が親切に目的地の校舎にまで案内して下さったとの事であった。あの時、雨が降り出さなかったら二人の出会いはなかったろうとの回想であった。

いずれにしても、人生における不思議な人と人との出会いは、人間には偶然とも思えるが、天の深い支配によるものではない

かと感嘆せざるを得ない。

(この拙文は、天理やまと文化会議編『G-TEN』第22号特集・「生命の記憶」のまえがき「回顧」に記したものに加筆訂正したものです。三木先生はこの文章校了直後に出版を見ることなく突然出直されました。)

本連載を終わるにあたって、著作予定の『天理思想—「陽気遊山」の未来学—「もの」から「こと」へ』(仮題)の「元の理」に関する教内外碩学による『G-TEN』に掲載した諸論考の一部を参考に追記しておきたい。またここでは未掲載だが、白川静の『文字逍遥』に見られる「遊ぶものは神である」にはじまる「遊字論」も「つとめ」との関連において必須であると確信しているので取り上げてみたいと考えている。

第一章 陽気・遊び 『G-TEN』19号

「神・人間・遊び」.....	岩田慶治
「生活のすべてに遊びを」.....	別宮貞徳
「遊ぶ自己と遊ばない自己」.....	松岡正剛
「物見遊山と宗教」.....	石森秀三
「遊山と悟り—禅宗にみる求道と楽道」.....	入矢義高
「遊びと宇宙創造—水と魚および「元の理」について」.....	荻野恕三郎
「あそび」の存在論—「陽気遊び」の世界観.....	金子 昭

第二章 「元の理」編

1. 「比較神話学からみた「元の理」について」—『G-TEN』第19号.....	大林太良
2. 「人間の進化と「元の理」」—『G-TEN』第32号.....	荒俣 宏
3. 「「陽気ぐらし」学としての「元の理」」—『G-TEN』第28号.....	山折哲雄
4. 「深層心理と「元の理」」—『G-TEN』第20号.....	河合隼雄
5. 「生命の記憶としての「元の理」」—『G-TEN』第22号.....	三木成夫
6. 「たましいの物語」としての「元の理」」—『G-TEN』第59号.....	松本 滋
7. 「進化論と「元の理」」—『G-TEN』第32号.....	河合雅雄
8. 「「元の理」と世界思想」—『G-TEN』第26号.....	蔵内数太
9. 「宇宙神話としての「元の理」—道教の関連もふまえて—」—『G-TEN』第29号.....	湯浅泰雄
10. 「「元の理」は「今の理」」—『G-TEN』第35号.....	岩田慶治
11. 「「元の理」と『切れ』の構造」—どじょうとフグが象徴するもの—『G-TEN』第41号.....	大橋良介
12. 「「元の理」は日本的な曼陀羅」—『G-TEN』第28号.....	松永有慶
13. 「易・陰陽五行と「元の理」の対応」—『G-TEN』第28号.....	吉野裕子
14. 対談:「生命記憶としての「元の理」」—『G-TEN』第22号.....	三木成夫+井上昭夫
15. 鼎談:「現代・思想と「元の理」」—『「元の理」の世界』第5巻.....	蔵内数太+大橋良介+井上昭夫
16. 鼎談:「新・有神論としての「元の理」の位置」—『G-TEN』第2号..... エリ・アンペール、ダリッシュ・シャエガン、井上昭夫。